

# 七、どり梨し道

生まれは滋賀、今では彦根市だが、かつては国鉄線で二つ、京都寄りの稲枝駅。上りホームからすぐに見える、稲枝小学校が母校。そこまで通うのに四キロ、

ように良質の米の産地で、延寿寺はかつて豊かな寺産をもつ古刹。麓から約百メートルほどの高台にあり、頑固な石垣は、一寸した古

依を得た、一絲文守の弟子ゆえで、土蔵の二階には蔵書が収まり、当時の学問水準を語る。後年の私は開山の蔵書で、自分の研究を支

花園 大学  
国際禅学研究所

やなぎ だ せい ざん  
柳田聖山

<2>



生家の寺の本堂前で竹馬の友とともに（右が柳田さん）

## 稲枝の延寿寺 中興開山の蔵書が研究の支え

寺名の延寿寺は、宋朝文化を代表する五山の一つ、杭州西湖の靈隱寺で、全百巻もある禅学百科、「宗鏡録」を書きあげた高德、永明延寿の名にもとづき、「宗鏡録」百巻は、今私の研究テーマの一つ、むしろ大きいプレッシャーとなっている。

城のように、老松としたれ桜、そして紅葉林につつまれる本堂と庫裡、菊花紋をもつ土蔵がならび、一段高い背後の台地に開山堂、本堂の右に鐘堂がある。菊花紋は、中興開山が、後水尾法皇の帰

えられる。幼時の記憶でも、村の青年たちが、父の下に漢籍の素読に来て、机をならべた景色がある。本山の永源寺は、湖東平野を東西に横断、鈴鹿山系

に水源をもつ愛知川上流にあり、今は紅葉の名所として知られるが、右にいう中国五山の奥の院、天目山に隠れていた中峰明本に参

けた、鎌倉末期の入元僧、寂室の古道場で、いわゆる幻住の風が、今も生きつづける小さい宗門。江戸の初期、永源寺を中興するのが一絲で、延寿寺はその法を

とこに、私の生涯の転機が起る。当時、禅寺で子が生まれるのは、おそらく私が最初。今ではごくあたりまえのことに、私は今もこだわ

りつつけている。血統相續が建て前の浄土真宗とちがいが、禅僧は師より弟子への法脈を大事にする。明治以後、肉食妻帯勝手とあっても、禅寺で俗縁を表に出すのは、大正期に入って後のこと。たとえ実父実子でも、生まれおちると同時に、師弟関係を結ぶので、ある年齢に達すると、不知不識のうち、子は父について受戒する、厳密な儀式が必要。そこに無理があり、建て前とホンネの矛盾が、気にな

りだしたらもう救われな

い。「生マレテキテスママセン」という、近代文学に共感したり、出来るだけ気にせぬよう、別の本業に専念するわけだ。事柄は寺生まれに限らず、医者でも教職でも、役人でも芸術でも、すべての職種に含まれるものの、僧職を職業と割り切るには、やはり何処か無理がある。

# 七・どり・染・道

彦根中学を卒業、京都に  
来たのが昭和十五年の春。  
臨済宗妙心寺派の最高学府  
・花園大学（当時は臨済学  
院専門学校）に、以来  
六十年もの御縁。願書  
を出すだけで、入学で  
きたとおもう。まとも  
に試験をうけて入学  
し、まともに卒業した  
のは、後にも先にも彦  
根だけ。

花園 大学  
国際禅学研究所  
やなぎ だ せい さん  
柳田 聖山  
<8>

それ三日間行  
われて、絶対  
必修の卒業条  
件。接心のときは、山内の  
学長老師の寺で、直日と助  
警、典座役は上級生、ふだ  
んは事務室で事務をとる、  
学監や生徒監、会計掛の先  
生が、法衣姿も凛々と、知

臨済学院専門学校は、旧  
大学令による三年制の専門  
学校だが、全校生百名足ら  
ず、僧堂生活と同じ、全寮

## 禅学とその批判、同時に関心



臨済学院卒業、最後の接心

職なみの芸達者がいる。悪  
所通いの資本もかなりとみ  
うける。

カリキュラムは宗乗と余  
乗、今の一般教養にあた  
る西洋哲学や歴史、語学  
など。中等教員の免許をと  
るため、倫理系の学科が多  
い。

宗乗とは禅学、余乗とは  
禅以外の仏教学だが、西田  
哲学の全盛期ゆえ、何でも  
彼でも絶対矛盾の自己同一  
で、難しい講義がつづく、  
少しばかり菓子を用意し  
て、先生をかこんでの茶話  
会にきりかえ。生徒の方か  
ら絶対矛盾でゆく。軍事教  
練もあるにはあるが、座禅  
で肚をつくり、死ぬ覚悟が  
求められた。

所帯をもつあり、他山その  
他で小僧生活の君もあり、  
通学途中、裏通りで軟派も。  
寮内でも十人十色で、部屋  
の障子は大半が破られてい  
る。何故やぶれるのか、田  
舎ものには分からぬが、学  
期末の無礼講のときは、本  
市川白弦教授である。先生

は同じ臨済学院中学部で、  
英語担当が本務だが、専門  
学校では社会倫理、教育史  
などを受けもち。新鮮で魅  
力あり、少数派の尊敬を集  
めた。私たちより先輩で、  
中学部にいた水上勉さんの  
記憶では、先生は毎日校庭  
のすみで、ひとり焚き火ば  
かりしていたという。

先生もまた寺生まれで、  
愛知県出身。早くから宗  
門の在りようを疑い、生ま  
れた寺を出る一方、戦時  
体制下の社会倫理を究め  
て、自分をいじめつくす  
のだ。

幸か不幸か、臨済学院で  
先生に学び、素直に寺の子  
になりそこね、私は禅学と  
その批判の学に、同時に関  
心をもちはじめる。若い私  
は矛盾を承知で、祖父母や  
父母の期待を、すんなりう  
けいられなくなる。

# 七、どり梨し道

洛東一乗寺、詩仙堂の東に隣して、上田堪庵の山荘がある。私は請われて月に一度、禅の話を始め

が大切、悟るだけではないから、語心会はすでに中止、語心の桜だけが全盛だった。

人に増え、集まりを悟心会とよぶ。南禅寺慈氏院の語心会をうける、上田家と私のさ

花園 大学  
国際禅学研究所  
柳田聖山

<21>

## 悟心会の歌

昭和初年から敗戦へ、慈氏院住持の柴山全慶が、崩落する時代を憂え、心許す知己を会して、良心を語る集いとし、境内の語心の桜にことよせ、風雅をよそおのが発端。本心を語るの

老師はモダンボーイで、早く婚して家族をもつ。歴史とした師家分上だのに、禅の形骸化を嫌い、得意のエスペラントで、共産圏に禅を説くのが夢。英文学や西田哲学、芸術家との交遊もある。

た。後に老師の名句となる、花語らずのモデルである。老師はすでに愛妻を失い、法兄の華山大義も被爆、にわかになやむなく僧堂に出

## 結成20年機に作詞、感無量



作曲の松田晶さん（右）と柳田さん（竹紙に描いた自画像を贈る）

て、野仏庵悟心会と命名した時、総門の扁額を書くのは、老師の法嗣勝平である。陶庵公西園寺も、一時山陰に身を隠し、心を語る茶室を構えていた。

悟心会の名はまっとうで、往年の老師の意に反し、私の好みにあわないが、会はずでに二十年の歴史をもつ。私は直接に禅を語らず、禅のテキストを読むだけが、爽やかな山荘の気のせいか、いくつかの名作が生まれた。聞き上手、上田一家の力。

世、五山之南禅管長の責めを負う。上田家とのつきあいは、おそらくはそのころだろ。門前の順正書院を手に

結成二十年というので、われながら感無量、思いついての会歌一編。  
野仏の谷ゆるやかに、春は朝、耳を洗わん、我ら今、悟心の集い、幼児ののど笑いあらたに。  
以下四番、京の四季と朝夕の、山気の推移を楽しむ歌、私の山水経である。幼児の句は、西田幾多郎をふまえる。  
折しも会友林良三郎のおかげで、最前線の作曲家松田晶さん、田昌を得、老若男女、皆で合唱できる歌となる。  
小学校以来、唱歌が苦手、人前で歌ったことのない私には、破天荒の作品。悟心会は果たして悟心か、心を語る語らないまでも、だれも心を歌うのである。私は独りりで、悦に入っている、古稀ゆえの功德である。

# 七、どり平し道

妙心寺山内、春光院の奥にある、久松先生の草庵に、若い哲学者が集うのは、戦争末期から戦後にかけて。切実な生死の問いが動機、先生の禅を慕ってのこと。先生は西田哲学の直系で、西田は特に和尚とよんで、ひそかに畏敬している。私たちは徹夜で語り、充たされた胸をはって、暗い夜道を急いだ。

花園 大学  
国際禅学研究所

やなぎ だ せい ざん  
柳田 聖山

<13>

## 学道々場

学道々場ができ、さらに門戸を開いて、世界のFA Sとなる。一九六〇年代、鈴木大拙のすすめで、先生が欧米各地をめぐる、海外の期待に込めてのこと。F

能ではない。伝統の方法には、改革が必要。F

ASの運動には、大きい困難が予想された。哲学者は理論倒れ、実践には向かない。私が学道々場に加わるの

## 富貴と素寒貧の集まり



鈴木大拙氏（2列目右から3人目の横向きの人）一行を迎えて（後列右端が柳田さん、靈雲院寸心塔）

心寺山内に部屋を借り、先生のすすめで佐茶に専念中の、柳田静江に雑務を押しつけ、私が直日、兼ねて典座を引きうけての、年三回

で、だれもみな本気であった。完全に身も心も、道場に捧げての、戦後約十年。当時、遠く欧米の地で、同じ課題に悩んでいた鈴木大拙が弟子を引きつれ、参加したこともある。会員が増えるに従って、次第に矛盾が表面化する、六〇年安保問題その他、外界の激動に対して、道場は何も答えていない。世界の平安なしに、個人の悟りはあり得ない。あたかもかつての新しい村や西田天香の一燈園が歩む苦難のあとを追うのだ。僧堂なみの共同生活をめざし、竜安寺に道舎（学道々場道舎）を借りるころ、試練の突破は、絶望的となる。食いものが尽き、迷い犬が死んだ時、私たちは漸く覚悟を決めた。

今にして思うと、学道々場の壁は、久松先生が生まれながら身につけていた、もう一つの大きい禅の要素、佐茶の工夫に気付く暇がなかったこと、否、気付くのが遅すぎたこと。先生を慕う諸君が、早く心茶会を結成しているのと、道場は全く無関係であった。心茶会は富貴の集まり、学道々場は素寒貧。両者を一つにしたいという、先生の念願は、終に未了の公案となる。言うならば佐茶の工夫は、単なる趣味のことではない、流儀技藝のことでもない、生命をかけての稽古、本格的仏道修行のはず。私たちは出直すほかなかかった。